

二〇二六年度

《適性検査型選抜入試》

# 検査Ⅰ

時間 四十五分

## 受検上の注意

1. 解答用紙に、受検番号・氏名を記入してください。
2. 声を出して読むはいけません。
3. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。  
方法を誤ると得点になりません。
4. 検査終了後、解答用紙を回収します。

郁文館中学校

1 次の**文章1**と**文章2**とを読み、あとの問題に答えなさい。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

### 文章1

庭や会社の敷地しきちの木を、プロに頼たのんで木工品にしてもらうのは、なかなか贅沢ぜいたくな行為こういです。それで気持ちが満足する、というのは大事なことです。なにをつくろうと、木工品それ自体としては高額なものにならざるを得ません。ですので、そうした場合にも、単なる贅沢な木工品づくりであることとどまることなく、「投資」と言えるなにかを生み出すことができるよう、あの手この手を考えます。贅沢な行為としてではなく、投資になる行為にできればそれに越したことはない。一例として、その木と一緒に暮らしてきた当事者の物語になるように、イベントや参加の＊プロセスを考えたりするのはそのためです。

環境問題かんきょうやSDGsなど、＊権威けんいある言説げんせつを後ろ盾だてにして成立させる、ということも考えられる方法です。プロジェクトの現場で、＊クライアントの側からそうした言葉が出ることもよくあります。ですが都市林業では、そうした言説を＊援用えんようしたプレゼンをしたことはありません。むしろ、環境問題やSDGsなどがなかったとしてもやって良

かったと思える事例をつくりましようと言ってきました。なんとなく環境に良さそう、といった曖昧あいまいなことではなく、もっと明確な＊メリットがなければ選えらばれない、買ってもらえない、成立できないという、当たり前の事業環境、すなわち平場ひらばこそが、最も＊クリエイティブな環境だと考えています。私たちは、木の活用を平場でどう成立させるかを頑張がんばるのであって、平場を平場でなくするために活動すべきではありません。なんらの優遇ゆうぐうも、まして補助金も助成金も、街に木を植うえなさいだとか、伐きったら木材にしなさいなどといったムードも制度も、ないほうがいい。漫画まんがやアニメがクリエイティブであり続けてきたように、平場に放はなつておいてくれれば、偽物にせものに機会が与えられることなく、本当に人を喜よろこばせた本物だけが残のこっていくでしょう。私が都市林業の取り組みをはじめた初期の頃、周りの人からのアドバイスとして、助成金をとれ、＊クラウドファンディングをやれ、と並んでよく言われたのが、ブランドディングせよということでした。言われるということは、していないように見えたのでしようが、ブランドになるために必要なことはしていたつもりです。ブランドになるために、オシャレな写真や動画で雰囲気を出して＊プロモーションをすることだと思っっている人が多いようですが、ブランドの本質はそんなことではありません。その本質は個

からはじまる物語であって、自分らしくあり続けようとする継続けいぞくの日々であり歴史、すなわち本当のことが詰つままった物語です。ブランディングのために必要なは自分らしくあることであって、その自分らしさが他人から見ても好ましく、格好かっこう良く、真似まねをしたものであればこそでしょう。木を扱つかってそういうものにならないとするならば、すべきこととすべきでないことは明白であって、ここで「成立」の形を論じているのはそれを明らかにするためです。都市林業がどのように「成立」することを目指しているのかを、明確にするためです。

都市林業におけるブランディングとは、本当のことをし続けることです。アイデアが生まれ、取り組みをはじめて、まだろくすっぽ中身のある\*試行錯誤しこうさくごも、誰かを喜ばせる成果も出せていないのに、美しいプレゼンや、試作品に毛が生えた程度の実績でデザイン賞にでも応募して、ブランディングをしているつもりになってはいけないと思います。

都市林業というアイデアが生まれて以来何年も、私はそんなことに時間を使わず、一樹種でも多くの木について生きた知見ちけんを持てるよう、木が伐られる現場に張り付き、木と格闘かくとうして、毎日木屑きくずに\*塗まみれていました。ただただ、新しい木との出会いや気づきに夢中になっていたこともあり

ますが、同時に意識の片隅かたすみでは、なにかプロジェクトに関われるかもしれない機会が来た時に、この人になら任せて大丈夫と思われる存在にならなければとも思っていました。たとえばどこかの緑地で、プロジェクトの末端まつたんにでも関わられる機会が得られたならば、この現場にあるすべての木について、私はすでに木材としての活用を経験けん済みですと言えるように準備していた。いま振り返かえってみても、結果的にそのことが、小手先のプロモーションでは出せない決定的な力、すなわちブランド力を発揮はつきしてくれて、これまで誰も見たことがなかった街の木でできた施設しせつが誕生たんじょうするという、事例をつくることができたのです。

(湧口善之「都市林業で街づくり」による)

〔注〕

プロセス	……	物事の過程や手順。
権威	……	他人から認められる信頼と実績に基づく力。
クライアント	……	依頼人。
援用	……	自分の考えを補強するために他の例を引用すること。
メリット	……	利点や価値。
クリエイティブ	……	創造的な、独創的な。
クラウドファンディング	……	多数の人による少額の資金が他の人々や組織に財源の提供や協力などを行うこと。
プロモーション	……	商品を広めるための活動。
試行錯誤	……	失敗をくり返し、目標に近づいていくこと。
塗れる <sup>まみ</sup>	……	きたないものがついてよごれること。

## 文章2

閑さや岩にしみ入る蝉の声

\*芭蕉

しづかさや湖水の底の雲のみね

\*一茶『寛政句帖』

芭蕉の句は岩にしみ入るほど蝉が鳴いているのになぜ「閑」なのか。このちぐはぐが読者をこの句の世界へ導く誘い水になる。そして読者はこの「閑さ」は蝉の鳴いている現実の世界とは次元の異なる心の「閑さ」であり、宇宙の「閑さ」であることに気がつく。こうしたダイナミックな仕かけがある。

一方、一茶の句の「しづかさ」は湖水の底にしんと静まる雲の峰（入道雲）の「しづかさ」であり、湖水の「しづかさ」である。

芭蕉の句は「閑さや」と「岩にしみ入る蝉の声」の間に断崖が潜んでいるが、一茶の句の「しづかさや」と「湖水の底の雲のみね」は視覚的になだらかにつついている。

芭蕉は江戸時代前期の古典復興の時代に生まれ、古典文学の\*薰陶を受けて育った。芭蕉は日本や中国の古典文学

を踏まえて俳句を詠んだので古典を知らない人にはわからない深遠なものだった。

古池や蛙飛こむ水のおと

この古池の句にしても、蛙は必ず鳴き声を詠むという和歌の伝統を踏まえている。それなのに蛙の鳴き声ではなく水に飛びこむ音を詠んだところが芭蕉の\*俳諧だった。和歌の伝統を知らない人々には、この句の世界の入り口は閉ざされている。

芭蕉は\*最晩年、古典から離れようとした。しかし古典と融合し一体となっていた芭蕉にとって古典離れは自殺的な試みだった。

東国の山村で育った一茶は生まれたときから古典などとは縁がなかった。一茶の俳句を育んだのは故郷\*柏原や江戸の下町の人々の話す日常の言葉だった。だからこそ一茶の句は誰にもわかる句になった。芭蕉が試みた古典離れを一茶は地でできた。こうして一茶は俳句の大衆化・近代化の時代の最初の人になる。

梅干と皺くらべせんはつ時雨

『文化句帖』一八〇六年（文化三）

老いは今も昔も嘆かわしいものである。仏教では生老病死と人の四つの苦しみのひとつに老いを数える。古来、老いを嘆く詩歌は数知らず。

いまははた 老いかがりて 誰よりもかれよりも  
低き \*しはぶきをすする \*釈 遼空

美しく齡を取りたいと言ふ人をアホかと思ひ  
寝るまへも思ふ \*河野裕子

これに並べても一茶の特長は際立っている。自分に忍びよる老いを「梅干と皺くらべせん」と大いに笑っているところである。

芭蕉は人生における「かるみ」をとなえた。生老病死など人生の悲惨に一喜一憂せず、宇宙のような大きな目で人間界を眺めてゆきたいという人生観だったのだが、その芭蕉でさえ、

衰や齒に喰あてし海苔の砂『をのが光』

とみずからの老いを嘆いた。

一茶の句は梅干と皺を比べようなどと芭蕉の「かるみ」をまさに地でゆく詠みぶりである。これまで家族や貧乏など人生の辛酸をなめてきた一茶には老いなど笑うべきものだったかもしれない。このとき四十四歳。当時はすでに立派な老人である。

（長谷川權「小林一茶」による）

〔注〕

芭蕉 …… 松尾芭蕉。江戸時代の歌人、俳人。  
一茶 …… 小林一茶。江戸時代の歌人、俳人。  
薫陶を受ける …… 教え導かれる。  
俳諧 …… 俳句を含む文学の総称。  
最晩年 …… 亡くなる直前の数年間。  
柏原 …… 現在の長野県。  
しはぶき …… せきばらい。  
釈 遼空 …… 明治時代の詩人、俳人。  
河野裕子 …… 現代の歌人。

り　　ん―**文章1**は都市林業の取り組みを通じて筆者の湧

口さんが感じたことがまとめられ、**文章2**では江戸時代に活躍かっやくした二人の俳人について書かれていますね。

たける―そうですね。**文章1**の筆者が伝えたいことは、

**ア**　　この大切さでしょう。筆者はこのことを本当のこととも表現していますね。本文からまだ誰も見たことがない事例をつくるために必要な考え方を学びました。

みなど―**文章1**では準備をすることが重要だとも書かれています

が、**文章2**を読むと、<sup>ア</sup>芭蕉と一茶はそれぞれ準備に対する考え方が違っていたことがわかります。

り　　ん―準備をすることも、いろいろな視点をもつことが重要なんです。せっかくの機会ですから、

<sup>イ</sup>四月から中学生になる私たちにとっての準備について考えてみましょう。

〔問題 1〕 たけるさんの発言の **ア** には **文章 1** のこと

ばが入ります。適切なことばをさがし、ぬき出しなさい。ただし、十五字以内で答えること。

〔問題 2〕

<sup>ア</sup>芭蕉と一茶はそれぞれ準備に対する考え方が違っていたとありますが、それぞれ俳句を詠む上で、どのようなことを大切にしたらと考えられますか。三十字以内で書きなさい。

〔問題 3〕

<sup>イ</sup>四月から中学生になる私たちにとっての準備について考えてみましょうとありますが、あなたにとっての準備とはどのようなことでしょうか。目的や方法についてもふれ、四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の「きまり」にしたがうこと。

条件

① **文章 1** ・ **文章 2** ・ **会話** の内容をふまえて書くこと。

② 準備は一つにしぼって書くこと。

③ 適切に段落分けをして書くこと。

〔きまり〕

○ 題名は書きません。

○ 最初の行から書き始めます。

○ 各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○ 行をかえるのは、段落をかえるときだけです。

○ 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます（ますの下に書いてもかまいません）。

○ 。と」が続く場合には、同じように書いてもかまいません。この場合、。」で一字と数えます。

○ 段落をかえたときの残りのますは、字数として数えません。

○ 最後の段落の残りのますは、字数として数えません。

